

絆 求 め て

12月25日発行

文責 私学振興専門員 久保田学

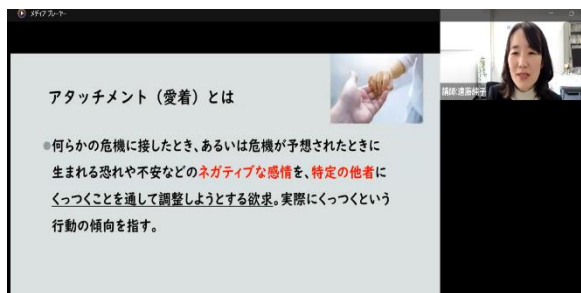


秋季公開講座ご参加ありがとうございました

令和5年11月18日(土)、昭和女子大学 人間社会学部 准教授 遠藤 純子先生を講師にお迎えし、「秋季公開講座」をWEBで実施しました。テーマは、「一人一人の育ちを支える3歳未満児の保育を考える ～0.1.2歳児のアタッチメント～」で、「乳幼児期の育ちとアタッチメント」「育ちを支える環境」「かかわりの質を支えるために」の3点についてお話いただきました。研修を通して保育者がこの時期の子ども達にどのような関わり方をしていく事が、子ども達の安心して学びに向かう意欲を高めることができるのか理解を深めることができました。

<研修から学んだこと>

- 質の高い就学前教育を受けた子どもは、その後の人生において学力の差はなかったものの、犯罪率、離婚率、生活保護率が低かった上に、所得や持ち家率が高かったということ。質の高い保育は社会性を育て、その投資は経済的な効果がある。これからの教育に求められるものは、自分たちが実現したい未来を、自分で考えて目標を設定しそのために必要な変化を実現するために行動していくことが必要だということ。自らの目的や行動が社会に対してどのように受け止められるかを考えたり、振り返ったりすることが大切。特定の大人とのアタッチメント、愛着関係が安心感、信頼感、社会的情動的スキルの育ちへ繋がる。アタッチメントとはネガティブな感情を特定の他者にくっつくことを通して調整しようとする欲求だということ。
- 私は現在3歳児クラスを担当しています。普段の生活で活動に追われたり、自分に余裕がなくなると子どもたちの「主体性」より「指示通りに動けること」を重視してしまったりする場面がありました。今回研修に参加して改めて幼児期の関わり方が子どもたちの将来に大きく影響してくることを学び、普段の生活を見直してみようと思いました。毎日忙しく1日が過ぎていってしまいますが、生活の中での「小さな満足感」の積み重ねを大切にすることを意識して保育していくことが大切だと学びました。子どもたちが安心感を持って挑戦し、探究できる環境作りを工夫していきたいです。また、「子どもの視点に立って環境を見直す」ことが改めて大切だと感じました。この活動のときはこの環境設定と決めすぎず、クラスの様子に合わせて柔軟に対応していきたいと思いました。
- 乳幼児期における教育は全ての土台を育てるという重要性をもち、その中で環境の一部である保育者の役割はとても大切であることがわかりました。土台づくりにはまず「安定した情緒」が必要であり、育むためには遊びや日々の生活を送る中で、子どもの行動一つ一つが、その子の学びにつながっていることを意識して援助することが大切だと感じました。援助する際にも子どもにとって保育者は「安心の基地」となる存在であることが重要であり、それは日々のアタッチメントや、言葉かけなどの関わり方の積み重ねで育まれていきます。見守る姿勢「見ていますよ」という心の根っこに安心感を与える存在がいることで、子どもは新たな探索行動に向かい、そして新たな学びを増やすという経験につながります。その経験は自信となり、子どもを成長させます。これからの未来に向けた土台づくりに、私たちは安心の基地として、受け止め、支え、背中を押し、励ませるような保育者でありたいと感じました。



<今後の保育実践に生かしたいこと>

- 昨年度途中入園したA児、当初から母親から泣いて離れられず、母親も不安げでなかなか離れられないため受け入れに苦労していた。日中の保育では寄り添いの気持ちや丁寧な言葉掛けなどをし、気にかけるようにしていた。しかし、半年が経っても、母子分離に時間がかかり、受け入れる側として気が滅入ってしまうこともあった。そのため自分自身の保育がよくないのか・・・と自分を責めるようになった。そんなとき、先生方の配慮で、受け入れはどの職員も行えるようにと、別の職員が対応してくだ

さるようになった。その時にすごく気持ちが楽になったことを思い出した。先生の研修内容と照らし合わせてみると、①A 児も母も不安感が大きかった。まだ保育者が安心基地になりきれていなかった。アタッチメントが大切。②他の職員との連携により、気持ちが楽になり保育に臨めた。今後の保育では子どもとの信頼関係を築くこと、子どもにとっての安心基地となること、エージェンシーを考えた保育など、実践できることを考えて保育に取組みたいです。

- 人生の出発点である0~2歳のアタッチメントの形成の重要性について改めて学ぶことができました。現在3歳児。こだわったり泣き叫んだり怒ったり等の特性が強く出ていて、集団生活が著しく困難なお子さんを支援しています。「養育者との肯定的なイメージや物理的にくっついている安心感が内在化されたときに、自分は他者から受け入れられているし、養育者以外との関係にも適用するようになる。反面信用できない否定的な思いが内在化されたとき、はじめての人にもまず攻撃的になる。」とお聞きし、やはりこれが大きかったかとも思いました。これまでの育ちを思い辛い気持ちも湧き上がりました。でも覆すことができるという所でとても救われた気持ちになり今組んでいる先生と早速共有したいと思いました。方向性と対処に悩む日々でしたが、まずは一対一の愛着を強化していくこと。時間が必要だと思うけれど、ゆっくりゆっくりその子の安心基地になれるようやってみようと思いました。
 - 子ども同士が肯定的な関わりをしているクラスは保育者が子どもを肯定的に見ているというお話があり、心に響いた。実際、自分の心に余裕がない時は子どものマイナスな姿にばかり目が向いてしまっており、注意が多くなることで子ども同士もトラブルが多くなるように感じる。反対に自分に余裕を持ち、子どもの良いところや小さい変化に気づき、認める言葉がけが多いと子ども同士でも「今日はこれだけできたのだね！すごいね！」と認め合う姿が多くなったように感じる場面があった。やはり、子どもは保育者の姿をよく見ており、自分の姿が子どもたちに影響しているように感じる。なんだかクラス全体が落ち着かない時は自分の心が落ち着いていない時であるように感じる。まずは自分が子どもを肯定的な目で見たり、結果ではなくプロセスを大切にしたりしていけるようにしたい。また大きなことを求めるのではなく、小さな承認を心がけていきたい。
 - 今回の研修を受けて、まずは子どもたち一人一人の安全基地を自分の中に育てていきたいと思いました。以前受けた研修でも、子どもたちに安全基地があることで、安心して園に通って自分を表現できると聞きました。今回の研修で養育者とのアタッチメントによって内在化された自己と特定の大人との関係性に対する肯定的・否定的イメージを養育者以外との関係にも適用するようになるとお聞きして、まさに今それが見られるようになってきたと思いました。また手が出やすい子どもに対して、今までは手が出ないように近くで見守っていましたが、敏感な子ほど自分のスペースに人が近づくことに対して不快感を持つと聞いて、パーソナルスペースの確保をまずは整えていきたいと思えます。必要以上のリアクションではなく、子ども自身の喜びや達成感に寄り添う声かけやサインを心がけていきたいと思えます。
 - 来年度から幼稚園から認定こども園になるので、今まで経験のない未満児の保育について学びたく、今回の研修を受けさせていただきました。乳児期は愛着形成が大切な時期なので、1対1の関わりや子どもと楽しい時間をたくさん共有していき、アタッチメント関係を築くことを大切にしていきたいと思いました。また遊びを通して、探究心や好奇心など様々な力が身につくからこそ、私たち保育者が子どもたちの安心基地になり、子どもたちが安心していろいろなところに冒険し、不安になった時に温かく迎え入れる存在でありたいと思いました。今、以上児の担任をしているからこそ、乳児期の関わりの大切さを感じる場面もあるし、乳児期に得た安心感やチャレンジ精神が大人になってからの社会性や主体性などに繋がってくると思うので、一人一人にあった関わりを大切にしていきたいと思いました。来年度への要望としては、乳児期の子どもたちの保育について事例を含めてまたお話していただきたいし、以上児の保育についてのお話も聞きたいです。
- ありがとうございました。今回の研修で学んだことを保育に生かしていきたいです。

3歳未満児と一言で言うこともできるわけですが、実際には0歳、1歳、2歳とその成長過程で、子どもへの関わり方には大きな違いがあります。それだけにそれぞれの年齢での関わり方を理解し、工夫して対応していく事が保育者には求められるのです。私たち保育者は、その子の成長に合わせ「安心基地」となりうることを。そのために、乳幼児とのアタッチメントをどう築いていくか。

日々の保育では、一斉活動が多いものです。しかし、そのような中で、一人一人の子どもにどのように対峙するか。今回の研修での学びを今後に生かす上で、子ども目線に立ってこれまでの自分の保育を振り返ってみることから始めたいですね。（専門員 久保田）